

〔奈良編〕

人間らしさを教えてくれる

奈良の街のリズム

紫舟 書家



撮影:Susumu Yasui

しゅう 書家
6歳から書を始める。会社員を経て、2001年に書家活動をスタート。書の本場・奈良で3年研鑽を積み東京へ。書を用い、文字に表情・感情をつけ、情報としての文字に意思を吹き込む作品を発表。NHK大河ドラマ『龍馬伝』題字をはじめ、テレビ番組・CM等に作品を提供。書についての新聞連載、国内外での作品展示など幅広く活動。10年、手島右卿賞受賞。
<http://www.e-sisyu.com>

神戸で会社員をしていた私が、書家としての道を歩み始めたとき、何かに導かれるように奈良へ移り住んだ。ビジネスで成功し世界に出るなら東京かもしれない。癒しを求めるなら沖縄でもいい。でも、そのときの私には奈良への風が吹いていた。奈良の有機的な空気のなかで、生きることの本質を学ぶことが必要だったのだと思う。

それまでの私にとって「生きること」＝「仕事」であり、職業選択が重要だと思いつつ、うまく選択できずにいた。奈良に来て、人のつながりや暮らし方、季節が移りゆく美しさ、ゆっ

たりとした時間の流れなどに触れ、生きていくペースとなるものを学んだ。

大都市は今、二十四時間動いている。東京では「夜九時から打ち合わせ」ということもしばしばある。それは大都市ならではのパワーの源でもあるが、みんなどこかで相手にあわせて無理をしている。がむしやりに働くなかで犠牲にしているものがあることに気づくのは難しい。

奈良は、その対極にある。五時になると仕事は終わり、お店も早くに閉まってしまふ。仕事は早く切り上げて、家族や

友人と食事を楽しむ時間を大切にする。それは本来、とても人間らしいことだ。

仕事だけが人生ではない。奈良の人々は自分の生活リズムを大切にしている。奈良で過ごした三年間に体感したことは、今も私にとって大切な礎だ。それを経験せずに東京に出ていたら、周囲に流されて何かを見失い、ワーカホリックになっ

たろう。

東京では風景はめまぐるしく変化する。しかし奈良は変わらない。平城遷都から千三百年、あれだけの神社仏閣が変わらず残っている理由は、地元の人たちにボランティア精神が根づいているからだと思う。自分の生活、自分の街を当たり前のように守る。外から来た人にもそれを求める。私も最初はとまどったが、「郷に入っては郷に従え」。結果として、その何倍ものお返しをいただいた。

東京が毎年変わるなら、奈良は百年単位。これからも長い目線で、外から来た人を受け入れながら、奈良に暮らす人にとって心地よいペースの街であってほしい。

曜

今も奈良へはよく行く。東大寺から興福寺、奈良公園——いずれも壮大で、しかもそれぞれを区切る塀がない。いつ、誰が訪れても拒まない。天平の昔から異国の多様な文化を受け入れてきた、心の敷居の低さ、おおらかさの土壌があるの



紫舟「一人ではないことに気付き 独りであることを知る」